

こんにちは、国語科の江西です。今日は予定通りだと教科書販売の日ですので、久々に学校に来ていると思います（この文章を書いているのは一週間ほど前です）。とはいえ、日付としては、今日が普段の春休みの始まりの日ともいえませぬ。長い休校日ですが、既にその半分以上が終わったという言い方もできます。まだまだ休みは長いと思って勉強に励まずにここまでできてしまった人もいるかもしれませんが、そろそろ本気で取り組まないと、致命的な出遅れになりかねませんよ。

さて、ここまで二回は古文と漢文の現代語訳を掲載し、古典の勉強の仕方について述べてきました。ついでは何ですが、折角の機会なので、今回は現代文についてのアドバイスを少し（と言いながら長くなりそうな予感：）しようと思います。まあ、僕の授業や講習で言っていることなので、よく聴いてくれている人には新鮮味がないかもしれませんが、授業をするつもりで書いていきます！

〈「現代文はセンス」は怠け者の言い訳である〉

皆さんの中には、現代文なんてセンスがあるかどうかで決まるし、勉強しても意味ないやん、と思っている人はいませんか？ また、現代文の成績を上げるためには読書が必須だ（読書習慣がないから現代文の成績が悪いんだ）と思っている人はいませんか？ これらに対する答は「NO」です！ これらは努力もせずに諦めている人が自己を慰めるための見苦しい言い訳でしかありません。本をよく読む人でも現代文の成績が悪い人はたくさんいます。もちろん、「センス」（この言葉の意味をどう解釈するかも変わってきそうですが）のある人や本をよく読む人は、現代文を得意にできる「下地」はあるといえるでしょうが、それだけでは不十分です。「センス」は「才能」とは違いますが。「服のセンス」も、いろんな服を着て、見て、場合によっては雑誌等で「勉強」して磨かれていくものですよ。現在「服のセンス」がある人でも、幼少期には〇〇マンなどのキャラクターものの柄の服を喜んで着ていたことでしょうか（今でも着られますか？）。意識しているかどうかの差はあるでしょうが、センスは磨くと向上するものです。「現代文のセンス」も「ことばに対する感覚」ですので、ないと思っている人は、以下に述べる内容を意識して言語生活を営んでいくと良いと思います。

〈ことばとはコミュニケーションの道具である〉

皆さんは現代文も真剣に勉強していますか？ どうしても、数学・英語・理科等に（国語の場合もまずは古典に）勉強のウェイトを割かなければいけないので、なかなか現代文まで手が回らないというのが本音かもしれませんね。君たちは高津高校に入学できたのですから、ある程度の国語力は備わっているはずですよ。それでも、三年生を前にした現在、しっかり勉強している（つもりの）はずなのに、現代文が思ったほど伸びていないという人もたくさんいると思います。

そもそも、ことばとはコミュニケーションの道具であり（元々は他と区別するためのものとしてのことばがあります）、文章とは、書き手が何かを相手に伝えるために書くものであり、評論であれ小説であれ、何か伝えたいことがあるから書くのだ、ということは改めて意識しておきましょう。

〈現代文の授業と現代文の試験は別物である〉

ただし、読み物としての文章と、試験問題としての文章には違いがあることや、授業と試験の性質の違いについても理解しておく必要があります。現代文の授業とは、評論であれ小説であれ、文章を長い時間をかけて精読し、新しい見方を知り、自分の考えを深めるためのものです。夏目漱石「こころ」の授業を思い起こすと分かりやすいと思います。それに対して試験の現代文は、初見の文章を読み、内容を理解しているかを問われるので、かなり毛色が違います。問題を解く力や偏差値だけを求める「即物的な」人にとっては、現代文の授業は物足りなく感じるかもしれません。しかし、文章の勘所を見抜く力や、長い文章を読む耐性、細かな表現にこだわる読み方等は、授業でこそ身に付けられる部分だと思えます。

〈現代文とは？ 評論とは？ 小説とは？〉

そもそも、「現代文」とは何でしょう？ それは、簡単にいうと、現代（近代含む）に書かれた文章を読み、現代（の日本）のことを考えるための科目です。評論なら、文化・文明・環境・科学・経済・教育・言語・芸術…といった様々なジャンルに分けることができますが、どれも「現代の日本」の問題点（や優れた点）を述べ、より良い未来を作るにはどうすることが必要か、を考える内容になっています。そのために、対比として西洋や過去の日本

がよく出てきますが、当然「現代の日本」がメインです。筆者の考える問題点（主張）を一点だけ（複数の言いたいことを書くと言いたいのか分からなくなる）、論理的に述べたものが評論であり、我々素人にも理解できるように、その前提となる基本の話から始め、具体例・体験談・引用などで理解・イメージを助け、説得力をもたせる、という基本構造があります。小説は、作者が創作した物語を通して、何かのメッセージを読者に伝えることを目的に書かれたものです（努力は必ず報われる、恋は苦痛を伴う等）。また、随筆というジャンルもあります。これは、筆者が思うままに（随意に）筆を走らせて書いたものです。つまり、評論ほどの論理性はないが、小説に近いメッセージ性がある文章ですので、それを意識すると理解しやすくなるでしょう。現在、試験問題として随筆は流行っていませんが、勉強する順番としては、「評論↓小説↓随筆」が良いと思います。

〈現代文の試験とは？〉

それでは、現代文の試験とはどのようなものでしょうか？ ことばとはコミュニケーションの道具ですので、ことばの力を問う現代文は、コミュニケーション力を問うものともいえます。つまり、現代文の試験は文章読解を通してその理解度を図るもので、換言すると「僕（出題者）の言っていることを君（受験生）は理解していますか？」ということを確認するのが試験問題といえます。その力を確認するために、最も効果的な部分だけを切り取ったものが試験の文章となります。つまり、評論であれ小説であれ、「筆者／作者 vs 受験生」ではなく、「出題者 vs 受験生」なのです。

評論では、筆者の主張についての問題がメインですし、小説では、人物がドラマチックな出来事を通して心情が変化する部分についての問題がメインになります。評論は、前述したとおり、すべて論理的に文章で書かれています。小説では細かな説明がありません。「この出来事を通して○○は心境が変化して、それまで嫌っていた△△のことを認めた」などと書いてあったら小説として面白くないでしょうか？ その変化を「書かれてあることを根拠に」読み取ることが必要なのです。ここで、書いてもいないことを勝手に解釈する人は、的外れなことを書いたり、選択問題では出題者の思う壺にハマってしまったりするので、点数が伸びません。評論であれ小説であれ、文章に書かれてあることだけを根拠に解答を求める、ということを意識しましょう。

試験の形式としては、センター試験（共通テスト）は選択式、国公立大学は記述中心、私立大学はその併用、といった特徴があります。その違いは、乱暴にいうと、採点側の手間の違いといえるでしょう。もちろん、各大学の問題に傾向がありますし、解答法としてのテクニカルな部分も多少はありますが、「答えに辿り着く基本的な思考の手順は同じである」ということは知っておきましょう。つまり、「僕は理系だし、共通テストの選択式しかないから楽だ」ということは全然ないのです。最後に、現代文の実力養成に必要なことを挙げていきましょう。

〈「アップリフト現代文」を活用しよう〉

まずは本気で解く。できれば入試本番のような緊張感で時間も計る（白紙なら浪人だ！くらいの覚悟で）。解説をしっかりと読み、基準に合わせて添削、採点する（○×××だけではダメ！）。自分の答えと模範解答の距離感（何が足りないのか）を確認する。何事もそうですが、本気を出して、現時点での限界（ベストパフォーマンス）を知っておかないと、レベルアップに繋がりません。

また、各ジャンルで問題視されていることをある程度知っておくことは大切です。前述したように、評論にはいくつかのジャンルがありますが、その分野の内容をよく知っていると有利に働くこともあります（小論文でも役立つ！）。これまでの問題集・教科書に出てきた評論を読み直す（解く必要はない）ことで、ある程度問題意識が高まると思います。それでも不安な人は、「国語便覧」の「表現編（410頁）」を読んだり、市販の小論文の参考書を読んだりして知識をストックするのも良いでしょう。当然、「漢字・げんたん」での語彙力養成も怠らずに！

…と、ここまで一所懸命に伝えようと思いましたが、書けば書くほど、こんなことを言いたかったのかなあ、という気になってきました。やはり、君たちを前にして語るほうが効果的だと改めて思いました。まあ、このあたりが僕の文章力の限界（というか、ことばの限界？）かもしれないですね。ことばって、丁寧に積み上げないと、なかなか思うことが伝わらないのですが、いくら尽くしても十全には伝えきれません。ことばはないと困るものですが、全然万能ではありません（目の前の葉っぱ一枚の描写すら満足にできないでしょうか？）。メールなどでよく誤解が起こるのもそのためでしょうし、だからこそ、お互いに誠実に言葉に向き合わないといけないのでしょうかね。

今回は疲れてしまったので、雑文を書く気力が残っていません（笑）。楽しみにしていた人がいたらすみません。